

2117 離島覚書（長崎県・寺島）



宇久島城ヶ岳展望台より寺島を望む

令和3年11月18日

市営渡船・みつしま

寺島は宇久島の南西約500mに位置する属島である。

小値賀島発7時の九州商船のフェリー「いのり」で宇久島に向かう。7時40分に宇久島の平港に到着した。船客ターミナルに宇久レンタカーの人が待機しており、現場で手続きをして、すぐさま寺島行の連絡船が出る神浦漁港へと車を走らせた。

神浦漁港は深い天然の入江になっていて、西側中ごろに渡船の発着場がある。出発の5分ほど前に到着し、レンタカーを道路脇に停めて、市営渡船「みつしま」に乗った。寺島には1日5便通っているが、そのうちの4便は寺島を経由して小値賀島の柳港まで行く（柳港からは納島行の船が発着しており、以前納島に出かけた時に利用したことがある）。

8時10分発の第1便の乗客は、私と工事関係者とおぼしき若い男性の2人だけだった。料金は170円、乗員は2人なので、全くの赤字路線であることは間違いないだろう。小値賀島は佐世保市との合併を拒否して小値賀町のままだが、宇久島とその属島である寺島は佐世保市と合併しているのので、連絡船は佐世保市営である。市は島民の足を赤字覚悟で維持しているわけだ。

後述するように島の中学校が廃校になり、本島に通うスクールボートが1963（昭和38）年に就航するが、この時から宇久島の神浦と寺島を結ぶ航路が開けた。その後、1975（昭和50）年に第2みつしま、1991（平成3）年に第3みつしま、2013（平成25）年に現在の船に代わっている。つまり、4代目にあたる。

寺島の西北にはノリ瀬という細長い地形が連なっているが、この前面はかつて噴火口であった。寺島漁港のあるところはさらに小さな噴火口・カルデラである。カルデラの中心部

にできた島が文字通り小島なのだ。このように周囲を陸地に囲まれていることから、冬季の北西風を遮り、台風時の風も遮ることから天然の良港だったのである。

船が島に近づくと、自生していた松がことごとく松くい虫にやられて白く立ち枯れた無残な光景が目に入った。約9分で寺島に着いた。

寺島は面積 1.30 km²、周囲 8.8 kmの台地状の島である。最も高いところで標高 38mしかないので全体に平坦である。深い湾の奥に寺島の唯一の集落が形成されている。

江戸時代は手羅島と称していた。もともと寺島は宇久島の東光寺の寺領であったことから、明治以降は寺島と書くようになったといわれている。手羅島の時代は流人の遠島処分の島であり、1726（享保 11）年には、五島藩 26 代盛住に山奉行として仕えていた高峯十之進が配流になっている。



神浦漁港に停泊中の市営渡船・みつしま（左）、寺島の船客待合所（右）

寺島漁港

寺島漁港（第 1 種）は北向きに開けているが、港の前に位置する小島が北風をさえぎり、東側の高台が東風を防ぐことから静穏が保たれている。

明治末期に防波堤 63mを建設して港としての形態を整え始め、大正末期には護岸 377mを建設している。1958（昭和 33）年に漁港指定され、さらに漁港の機能が整備された。また集落前には埋め立てにより 1,454 m²の平坦な用地が整備されている。

天然の良港であった寺島漁港は古くは風待ちの寄港地として栄え、また動力船が普及し始めた大正期以降は東シナ海に出かける延縄漁船の前進基地として、島根県や山口県方面の延縄漁船がここを利用していた。

寺島の周辺は好漁場で、しかも船の停泊に適していたから、大正の中頃には林兼商店（後の大洋漁業、現㈱マルハニチロ）が「出買い基地」を寺島に設け、出雲の手繰船や西彼杵地方の石村、茂木村のレンコダイ延縄船などの漁獲物を買付けしていたという。林兼商店の寺島を根拠とする買魚事業は昭和の初めまで続くが、その後、以西底曳網が発展して下関を水揚基地とするようになってからは出張所を引き払った。このため、昭和の初めごろから寺島は「漁夫出稼村」に変貌していくことになった。

林兼との関係が深かったので、出稼ぎ先は下関を根拠とする同店の鮮魚運搬船が多かったようだ。男たちは島を出て漁業雇われとして従事し、女は島で農業を担った。

戦前から戦後にかけて、捕鯨やトロールなどの遠洋漁業の乗組員として従事し、200 カイ

り時代になり遠洋漁業が衰退すると、タンカーや商船などに職を求め、さらに陸上諸産業へと就労部門を拡大させている。つまり世帯主は島外に職を求め、島は故郷として定期的に帰る場に過ぎなかったのである。

寺島漁港の前にある小島には若宮神社が置かれている。この神社は 1196（建久 7）年に安芸の厳島神社の分霊を遷座したものであり、海上交通の守護として知られている。また漁港の背後の高台には金比羅神社がある。人手が少なくなった今日、両方の神社は十分手入れが行き届いていると言い難い状態であった。



寺島漁港（左）、小島に置かれている若宮神社（右）

島民は 9 人

渡船を降りると、朝、釣ってきたカマスの内臓を処理している老人と、まだ 60 歳代と思われる比較的若い男性が船溜まりのところで話をしていた。早速、中に割って入り、島の現状について聞く。

彼らによると、現在実際に島に住んでいる人は 9 人で、うち男は 6 人だという。夫婦世帯は 1 戸しかなく、残りは単身者だということで、夫婦世帯 1 戸、男性の単身者 5 戸、女性の単身者 2 戸という内訳になる。ちなみに 2015 年国勢調査時の世帯数は 7 戸、人口は 8 人であったからこの間に 1 人増えたことになる。昨年度末時点の住民基本台帳上の人口は 8 人（男：5 人、女：3 人）だったので、今年度になってから U ターンした男性 1 人が加わったものと考えられる。その 1 人が出会った若い人の方だと思われる。

ところで 1965（昭和 40）年当時の島の人口は 352 人であった。高度経済成長期を境に人口流出が進み、1995 年には 42 人、2000 年には 34 人（26 戸）へと急速に減少し、過疎化と高齢化が進んだ。2015 年時点の高齢化率は 87.5% に達している。

離島の離島、つまり 2 次離島の生活環境は厳しい。隣の小値賀島の属島もそうだが、属島から無人島化が進んでいる。藪路木島、野崎島が無人島になり、六島は現在 1 人しか住んでいないので、無人島になるのはもはや時間の問題といい。

寺島も例外ではなく、すでにコミュニティを維持するのが難しくなっている状況だ。

小漁師

漁港内には漁船が 6 隻係留され、斜路に 5 隻の船外機が引き揚げられていた。島には上述したように男が 6 人住んでいるので、全員がいちおう漁船を保有しているのかもしれない。

そして船外機も併せて保有しているものと推定される。あるいは現在は本島側に住んでいる島出身者のものかもしれないが、この点は確認できなかった。

寺島は宇久小値賀漁協の管轄である。寺島には同漁協の組合員は准が3人いるだけで、正組合員はいない。したがって本業の漁師はおらず、自給用にたまに魚を獲りにでかける程度だろう。ちなみに戦後間もない1950(昭和25)年に寺島単独で寺島漁協を組織していたが、1957(昭和32)年に神浦漁協に合併吸収され、その後1995(平成7)年に宇久漁協と一緒にになり、さらに2006(平成18)年10月から宇久小値賀漁協となっている。島には漁協関連の施設はない。

寺島の人は近年ではタンカーや貨物船に乗っていた人が多く、定年退職後に島に戻り、小漁師として老後を過ごしているわけだ。おそらく昔から定年退職した年金漁師がほとんどだったと思われる。なお、漁船には曳釣りの竿が立てられていたので、カツオなどの曳釣りと一本釣りを中心に営んでいるのだろう。



漁港内に係留されている漁船（左）、島の漁師達（右）

旧小学校跡

漁港の背後に中央と東側の2つの谷筋がある。集落の中心は東側で、中央は人家が5～6戸少ない。中央の坂を登っていくと旧小学校の跡地があった。校舎のあった敷地は長いこと草で覆われていたようだが、最近一部を刈った様子で、旧校舎の敷地がはっきりと分かるようになっている。正門があったと思われる位置に「寺島小学校跡」と刻まれた比較的新しい御影石の石碑が置かれていた。

島の小学校は1887(明治20)年1月1日に尋常大久保小学校(古里)の分校として創立された。その後、1903(明治36)年に寺島尋常小学校として独立する。戦後、平村立寺島小学校と改称し、同時に平村立寺島中学校が創立された。ベビーブームの頃には児童数は100人を超え、中学校の生徒数はピーク時には39人いた。しかしその後、子どもの数は急減し、1963(昭和38)年4月1日には中学校を廃止され、本島側の中学校に通学ようになる。それに伴いスクールボート「みつしま丸」が就航し、本島への中学生の通学、島民の渡航の便が図られた。

さらに1972(昭和47)年3月には本島側の神浦小学校に統合されて分校になり、1977(昭和52)年3月には寺島分校も廃校になって、とうとう島から小学校が消え、子どもがいなくなった。

小学校跡の先は台地になる。松は松くい虫の被害にあってことごとく枯れ、大きな木はほとんどない。一帯はダンチクで覆われている。かつては台地上に畑があり、自給用の農作物がつくられていたと思われるが、山道の脇にはイノシシが集落内に入ってくるのを防止するための金網が張られている。金網の外は草が生い茂っているので立ち入ることはできない。寺領であったことからわかるように、もともと農業の島であったと思われるが、水田があったかどうかはわからない。

道路脇の草は刈られ、枯れた松は輪切りにされて積まれていた。ちょうど和水仙が蕾をつけ、ツワブキは黄色い花を咲かせていた。

そのまま台地を下ると、漁港の反対側の海に出るが、途中で引き返し、続いて東側の谷筋に形成されている集落を見に行った。



旧小中学校の校門跡（左）、台地上の枯れた松とダンチクの原（右）

廃屋

再び来た道を漁港に戻り、東側の谷あいには形成された集落を歩く。傾斜地に石垣が築かれ、階段状に家々の敷地がある。ただし半分ほどの家はすでに撤去され、空き地になっている。空き地には雑草が生えないようにコンクリートを塗布したところが多い。

家は20数軒建っているが、雨戸が閉じられている家が多く、大半は空き家である。中には崩れかけた家、すでに解体されてそのまま放置されている家もある。車を何台か見かけたが、すでに放置されて20年以上は経過しているようで錆だらけで腐りかけていた。

集落の所々に井戸がある。また空き地の一角にはタマネギや大根、ホウレンソウなどの自給野菜が植えられた畑もあった。周囲は鉄製の金網で囲われ、近くにイノシシ捕獲用の箱罠も設置されている。人家跡にはマツバガイやイシダタミなどの貝殻がたくさん落ちていた。おそらく島の周りの磯で採ってきて食べたものに違いない。

一番上まで登ったところで、左側から軽トラックがやってきた。私と同じ船で来た人と港であった若い方が一緒だった。なにか用事を頼んでいるようで、現場をみて歩いているような雰囲気だった。

てっぺんの分かり道に小さな広場があり、「大乘妙典一字一石塔」と彫られた石柱が建っていた。大乘妙典の経文を1字ずつ小石に書き写し、それを地中に埋めたもので、何でも島に流れ着いた武士を手厚く葬った墓だという。島の人々は手厚く無縁仏を葬ったのである。この分かれ道をまっすぐ進めば海にでるが、次の船まで時間がなかったのも、漁港に引き返

す。

坂道の左に位牌堂と地藏堂があった。寺はない。上述したように寺島は宇久島の東光寺の寺領だったので、島の人達は東光寺の檀家になっている。ちなみに東光寺は宇久氏の菩提寺で、1187（文治3）年建立された古い寺である。島内に墓は確認できなかった。本島側にあるのかもしれない。

五島列島の属島には、寺島のように島内に独自の経済的基盤を持たず、もっぱら島外への出稼ぎによって生計をたててきた島が多い。これらの島々は、捕鯨、以西底曳網、まき網などの遠洋・沖合漁業の衰退によって職を失い、島で生活することが困難になり、限界集落化が進んでいる。あと10年もすれば無人島化することは間違いない。小値賀島の属島の六島、中通島の属島の頭ヶ島、福江島の属島の黒島などが類似する。



東谷戸沿いの集落の坂道（左）、雨戸が閉ざされた空き家（右）

寺島を9時34分の「みつしま」に乗船、小値賀の柳港を経由して神浦に戻る。寺島の滞在時間は約1時間半だった。

【文献】

宇久町郷土史編纂委員会（2003）：宇久郷土誌，pp. 835.